L3J

本科２期 10 月度

解答

Ｚ会東大進学教室

東大国語

17章

【問題】（演習）

出典…紫式部『源氏物語』「花散里」　／　オリジナル問題

現代語訳

その（源氏の会いたいと思っている）お目当ての（麗景殿の女御の妹＝花散里が姉の女御と暮らしている）ところは、（源氏が）御想像になったとおりに、（来訪者の）人影もなくひっそりと暮らしておいでになる有様を（源氏が）御覧になるにつけても、いかにもしみじみとした様子である。（源氏は）まずは女御のお部屋で、昔の（桐壺院御在世のころの）思い出話などを申し上げなさるうちに、夜も更けてしまった。（陰暦四月）二十日の月が昇ってくると、（その光との対比で）ますます、鬱蒼とした木立の陰が一面に暗く（沈んで）見えて、（お部屋の）近くの橘の（花の）香りが、親しみを感じさせて漂って（くる。そんなひっそりとした雰囲気の中で見る）、女御の御様子は、齢こそ取ってはいるが、これほどまでにと思われるほど挙措態度に心遣いが感じられて、品もあるし、（また同時に）かわいげでもある。（その御様子を見るうちに源氏は、この女御が父の桐壺院から）特に人一倍きらびやかな御寵愛（をこうむること）はなかったとはいえ、（院も）気心が知れて親しみの持てる方だと思っておいでになったのになどと、お思い出し申し上げなさるにつけても、昔の（宮中での）ことが、あとからあとから続いてお心に浮かばないではいらっしゃれずに、（源氏も）涙をお催しになる。（そうこうするうちに）ほととぎすが、先ほどの垣根（で鳴いていた）の（と同じ）であろうか、（ここでも）同じ声で鳴いている。（自分の）後を慕ってきたのだなと思わずにはいらっしゃれない（この場の）雰囲気も、なんともしっとりした趣があるものだ。「昔話をしているとどうしてわかったのだろう」などと（源氏は古歌を）低い声でお口ずさみになる。

「たちばなの……（昔のことを思い出させるという）橘の（花の）香りが慕わしいので、ほととぎすが（その橘の）花の散るこの昔馴染みのお屋敷を探して訪ねてきました（が、私も同じように女御さまのことが懐かしくてやってまいりまして、こうして御一緒に昔のことを思い出しています）

昔のことが忘れがたい（ために物思いにふけってしまいますが、その）慰めのためには、何をさておき（こちらへ）お邪魔しなければならないのでございましたなあ。（こうした思い出話をしていると、そんな物思いの）このうえなく慰められることも、（またいっそう昔を思い出してかえって物思いが）あらためて募ることもあることでございます。世間の人は世の流れについてゆくものですから、思い出話も聞いてもらうのにふさわしい人が少なくなってゆきますが、（父と離れて育った私でさえ父を亡くしてこんなに悲しいのですから、頼りにする夫としての帝に先立たれていらっしゃる女御さまは、私にも）まして所在ない思いの紛れることもないと思わずにはいらっしゃれないことでございましょう」と、（源氏は女御に）申し上げなさる。何ごとも、たいそう、今さら言うまでもない（はかない）世の中だから、（女御もこれまで）何かとそれはしみじみと深く思い続けておいでになる御様子がありありと見受けられるのも、お人柄から（そう感じられるの）だろうか、ますますもののあわれが深まる感じのすることである。

「人目なく……人の姿もなく（寂しく）荒れている（私の）住まいは、（昔を思い出させる）橘の花だけが、軒端の目印のようになって、それがあなたさまをこの住まいに呼び寄せるきっかけとなっ）たのですねえ」

とだけお答えになった（女御の御様子）は、そうはいいながらも、他の女性よりはいかにも違って（優れて）いるなあと、（源氏は）お比べにならずにはいらっしゃれない。

解答

(一) **ア**＝源氏が御想像になった様子のとおりに
イ＝齢はとっていても、どこまでも心遣いが行き届いて
エ＝昔を思い出させる橘の花の香りが慕わしいので
オ＝物思いが慰められることも、かえってそれが増すことも

(二) 源氏が、亡き父の、麗景殿の女御について格別に寵愛はせずとも気心が知れて親しみを感じていた様子を、思い出している。

(三) 橘に昔を思い出して源氏が女御邸を訪れたということ。

【問題】（自習）

出典…李奎報『東国李相国集』／東京大学　99年

書き下し文

李子　南のかた一江を渡るに、与に舟を方べて済る者有り。両舟の大小同じく、榜人の多少均しく、人馬の衆寡幾ど相類す。而るに俄に其の舟の離れ去ること飛ぶがごとくして、已に彼の岸に泊まるを見る。予の舟　猶ほ邅廻して進まず。其の所以を問へば、則ち舟中の人曰く、「彼に酒有り　以て榜人に飲ましめ、榜人　力を極めて槳を蕩かすが故のみ」と。予　愧色無き能はず、因りて嘆じて曰く、「嗟乎。此の区区たる一葦の如く所の間すら、猶ほ賂の　有無を以て、其の進むや疾徐先後有り。況して宦海競渡の中、吾が手に金無きを顧れば、宜なるかな今に至るも未だ一命に霑はざるや」と。書して以て異日の観と為す。

現代語訳

私こと李が南方で、とある川を渡ろうとしていると、一緒に並んで（その川を）渡ろうとしている舟があった。（その舟と私の乗っている舟との）二艘の舟の大きさは同じで、漕ぎ手の数も等しく、（乗っている）人馬の数もほぼ同じようなものだった。ところがふと見ると、その（向こうの）舟は飛ぶように漕ぎ去って、もう向こう岸に停泊しているではないか。（それにひきかえ）私の（乗っている）舟はいまだに行きなやんで（一向に）進まない。そのわけを尋ねてみると、同船している人が言うには、「あっちの舟には酒があって、それを漕ぎ手に飲ませて（いるもので）、漕ぎ手も力を振るって櫂を漕いでいるからに過ぎませんよ」と。（それを聞いて）私は思わず顔に恥ずかしい思いがのぼるのを禁じ得ず、それで嘆いて「なんとまあ、こんな一枚の葦の葉（のような小舟）が（川を漕ぎ渡って）行くという取るに足りないことにおいてさえも、やはり賄賂の有無によって、その（舟が）進むのに速い遅い・先んじる遅れる（の違い）があるのだ。まして官僚の世界で（仕官を求めて）出世競争をするということにおいて、自分の手許に（賄賂に使うだけの）金銭がないことを考えてみると、なるほど今に至るまでまだ（自分が）官吏に任命されるという恵みに与っていないのも、もっともなことなのだなぁ」と（私は）呟いたことだった。（そんなわけでこのことを）書きとめて、それで後日のための反省材料として示しおく（次第である）。

解答

(一) 二艘の舟に乗っている船客や馬の数がほぼ等しいこと。

(二) ところが向こうの舟が高速で去って対岸に着くのがふと見えた

(三) 筆者の乗る小舟が川を渡るという取るに足りないこと。

(四) 官界での昇進に賄賂が関与すべきではないという提言。

解説

(一) 傍線部は先行する二句とセットになっており、「両舟・榜人・人馬」／「大小・多少・衆寡」／「同・均・相類」がそれぞれ対応している。したがって「人馬」は「(二艘の舟に乗り込んでいるそれぞれの) 乗客や積み荷としての馬」、「衆寡」は「数が多いか少ないか」、「相類」は「お互いに似ている」ことから「同じくらい」の意味となる。

「幾」は数量を問う疑問詞にも使われるが、ここでは前二句がいずれも平叙文なのでここだけ疑問・反語とするのは不当で、副詞だと判断する。「幾」が副詞の場合、読みは「ほとんど」となる。

これらをつないで解答を得るが、解答欄が一行しかないのでせいぜい二十五字程度でまとめなければならない。「ほぼ同じ」とあとで言うのだから、「数が多いか少ないか」は端的に「数」としてよい。ところが、「人と馬の数がほぼ等しい」などとしてしまっては、「乗客の人数と馬の頭数とが同じだった」、つまり「一艘の舟の中での (純粋な数のみの) 比較」のようにも読めてしまう。したがって、あくまでも「二艘の舟の比較」であることが明確にわかるように、答案の最初に説明を補う必要があり、同時に「人と馬」でなく「人や馬」と表現しなければならないことにも注意する。

さらに、「人」をそのまま答案に「人」と書いてしまうのも禁物だ。ただ「人」といえば「榜人」も「人」なのだが、船員の数の比較は前の句で済ませてあるので、ここでいう「人」は明らかに「乗客・船客」の意である。このことも答案に明示すべきだ。

(二) 傍線部を丁寧に訳せば「ところがたちまち、その相手側の舟は飛ぶように漕ぎ去って、もはやとっくに向こう岸に停泊している（または「しつつある」）のが見えた」といったところである。しかし解答欄は一行しか与えられていないので、これでは長すぎる。この問題では、「訳せ」と言ってはいるが、文意の根幹をしっかり残しながら枝葉を削ることが要求されていると見ることになる。

「俄」は「急に」の意味だが、「見」にかかっているので、答案では文末の「見えた」の直前に移動しつつ「ふと」などと縮めるとよい。「其舟」については、「自分の乗っていないほうの舟」であることが示されないと対比の効果がなくなってしまうので注意が必要。「如飛」は譬喩（ひゆ）なのでその意味するところである「速い」ことを言えばよいだろう。「已」は「現にそうなっている」ことを示す副詞として用いられているとも、また「今にもそうなりそうだ」の意を示す副詞であるとも解釈が可能だが、ここでは要するに「自分の乗っていないほうの船は、さっさと対岸に向かうのに、自分の船は遅々として進まない」ことが言いたいのだから、答案の文末で「見えた」と完了形にすれば省いても意味は変わらない。「彼岸」は現代日本語ではほぼ「あの世」の意味に固定して用いられる語だから、そのまま書いてはならない。「対岸」などとすれば字数を無駄にしない。

(三) まずは「一葦」が「小舟」の譬喩であることを読みとって明示するのが第一歩である。これは、近称の指示語である「此」で修飾されていることからわかるはずだ。ここまで「葦」については何の説明もないのに、いきなり「この」と言っているのだから、筆者の近くにあって水草の葉に通ずるものは何かと考えればよい。

「所」はここでは続く動詞を名詞化するための助字で、「所定」・「所有」などと同様の用法である。「～すること（もの）」といった解釈になる。「如」を「ゆく」と読んでいるからといって、「（舟が）進む場所＝川」などと勘違いしないように注意。（場所を示すなら「如処」などとすることが多い。）

ここで、傍線部が《抑揚》の表現の前半部に含まれることに注目する。傍線部直後の「間」の送り仮名に「すら」が用いられ、次の文の冒頭に「況」がおかれている。ここでは「況」を「まして」と読んでいるが、これはふつうは「況（～乎）」の形で「いはんや（～をや）」と読んで《抑揚》の後半部を導く助字である。ここでは後半部の文末に「乎」がないので、意味を取って「まして」と読んでいるだけのことだ。

さて、そうすると「区区」（出題者の〔注〕によれば「小さいさま」の意）というのは、「一葦」のことだけを言っていると考えるよりは、「こんなに取るに足りないことさえこうなのだから、まして……」の意味で用いられていると見るべきだろう。「ちっぽけな

小舟」などと「小舟」だけの修飾語として説明せずに、「一葦所如」全体を「ちっぽけなこと」の意識で見ていると考えて「区区」に対応する表現を答案の最後に置くと、筆者が《抑揚》の表現をとっている真意の理解が明確に反映された答案となる。

㈣「異日」は現代日本語ではまず使われない語だが、同義の字と置き換えると「他日」となって意味がわかる。ただし「他日」もそろそろ使用頻度の下がりつつある語だから、「後日」とするとなおわかりやすいだろう。

「観」は「無常観」などの語でわかるように「考え方・よくよく考えること」の意を持ち、「反省材料」といった意味合いで用いられる。ただし、「後日自分でよくよく反省する」と短絡してはならない。傍線部の前には「官界で出世するにあたって自分は金を持っていないので未だに仕官できずにいるのももっともだ」つまり「官界で出世するには賄賂が必要だ」と言っている。そのことを「あとでよくよく反省」してしまうと、「やはり自分も出世のためには賄賂を使わなければならない」などという結論が出てきてしまう。

ここで、「観察」などからわかるとおり、「観」は本来「よく注意して細やかに見ること」の意であり、ここから「見せること」の意も持つ。そう考えると、「現在は賄賂が横行しているが、このままではだめだ」という意味で「反省材料」となることを書き残すことによって、「後世の人々の注意を喚起する」という意味に解釈できる。

そもそも、士大夫階級に生まれた者は、なるべく早く科挙に及第して、天子のため・国家のため・ひいては人民のために働こう、という社会的使命を痛感しながら青年時代を送るのが常である。このことは漢文読解の背景知識として理解しておくべきだ。そして筆者は（出典の書名から後には「相国」すなわち総理大臣にまで昇進したことはわかるが、少なくとも）この時点では「至今未霑一命」すなわちまだ仕官さえ叶っていない状態にある。「まだ官僚に任命されない」と言っているのだから、少なくとも科挙には合格しているはずだが、それならなおさら、仕官の口が得られずにいるということは、この段階では高邁な理想を保って政治の腐敗に憤る青雲の志に燃えているはずだ。だからこそ、自分の乗り込んだ舟の漕ぎ手たちが、酒を飲ませてもらえないばかりに仕事をさぼっていると聞いて、自分のことでもないのに赤面してしまうのだろう。それほどの人物が「やっぱりワイロか」などと若いうちから変に「達観」してしまっては、総理大臣の地位にまで昇りつめられるはずもない。（それにだいたい、中央省庁での汚職が何かと話題になる昨今、東大という大学が受験生に賄賂・腐敗を勧めることになるような問題を出すのでは、たとえブラックユーモアだとしてもあまり上等とは言えまい。）ここはやはり、「川での経験を教訓として理解した文章」として読むべきであるし、また同時に、総長を初めとする東大教官のマスコミにおける発言の傾向から考えても、受験生に対する大学側のメッセージの込められた出題だと考え

るべきだろう。

●メモ●